
夏のホラー 2010 片想い

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏のホラー2010 片想い

【Nコード】

N7747M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

瞳には中学の頃から好きな人がいた。その人を追いかけて猛勉強し同じ高校に入るが彼はモデルになってしまい、余計手の届かない所へ。そんな彼に自分の気持ちを伝えるにはどうしたらいいか、悩む瞳だった。そこへ片想いを『解決』する方法が手に入る。

（前書き）

半日で作るのって大変（――¥）夜中に読んで下さい。

私の名前は深崎 瞳。大学3年生。今は某保険会社の総合職として働いている母と2人暮らし。これは、私が高校生の際の夏の思い出。

片想いの人がいた。名前は透。小学生の頃からの半分幼馴染。家もそんなに遠くない。透と同じ高校に入りたくて猛勉強したのを覚えてる。

でも、何てあんな人好きになっちゃったんだろう！無口で、キザで、カッコ付けで。

高校に入った途端、都内のプロダクションにモデルとしてスカウトされて、学校はほとんど来てないのに成績はいつもトップ。

悔しい！人の努力も知らないで！

「ただいま、瞳。」

夜遅く母が自宅のマンションに帰ってくると、「今日はカレーだね。美味しそうな匂いが外までしてきたぞ。」

笑いながら玄関で黒いヒールを脱ぐ。

「ん。そう。」

私は『心ここにあらず』という感じで答えた。原因は透。せっかく勉強して同じ私立の高校に入ったのに、当の本人は授業にはほとんど出ず、たまに来ると女子たちが彼を取り囲む。その隙に入る場所なんて私にはない。

「なーに、考え込んでるの？瞳。」

母がスーツから私服に着替えると、キッチンの銀色の鍋を覗き込み、「今日はエスニックにマトンだねー。私、瞳が作るご飯が楽しみでいつも外食しないでお腹空かせて帰ってくるんだ！」

と、木製の棚から白い皿を取り出し、炊飯器からご飯をよそう。

「瞳もご飯まだなんですよ？」

背後から母の声が聞こえる。

「ん。」

私はリビングのソファに座り、リモコンをぶちぶち押しチャンネルをあっちこっち回していた。どうしたら、透に『告る』事が出来るんだろう。手紙かな？でも、ファンレター多いだろうし、今更けた箱の中に手紙を入れるとか真正面から『告る』のも何だし・・・

「ほら、瞳！」

母が声をかける。「早く食べましょ、明日も学校なんでしょ？もう、9：00廻ってるわよ。あんま遅くに食べると太るぞ。」

「わかった！」

その『太る』に反応して、リモコンを放り出し、キッチンへと入った。ご飯をよそってカレーをかける。

「マトンだから低カロリーよ、お母さん。」

私は目の前の母に言った。

「そうね。でも、いつも悪いわね、迷惑かけちゃって。」

父は5年前にガンで他界している。今は母の収入と私のお小遣いはアルバイトで稼いで家計が保っている。母も今では部長に抜擢されボーナスも今年の夏は5割UPだった。

「この不景気によく加入する人いるね。」

スプーンはコンビ二のスプーン。別にスプーンが無いわけじゃないけど、何となく。洗い物少なくていいし。

「不景気だから入るんじゃない？」

黙々とカレーを食べながら、母は答えた。

「『乗換』ってやつよ。今までの保険からもうちよつと保険料の積立が少なくなる生涯保険。」

「ふーん。」

あんまりよく判らない。母は頭の回転速い人だし・・・

つか、透。

私の頭の中は今それでいっぱい！どうしたらこの気持ちを伝える

事が出来るんだろ。今は透のファンで彼の周りはいっぱいだし、前みたいに気軽に話せなくなっている。

「ごちそうさま。」

「あら、もう食べないの？」

「ん。ちよっと考え事。」

私はそう言うキッチン洗い場にお皿を入れ再びソファに座った。

すると。

『片想いの人を恋人にする方法。』

そんなテロップがブラウン管の端にあり、番組が始まった。バラエティ番組である。

「恋人にする方法か。」

私はその番組にかじりついた。結果、ちまたの噂で『片想いの人を恋人にする方法』には2つの方法があった。

1・新しい消しゴムに相手の名前を書き、全部自分だけで使い切る事。

誰にも貸しちや駄目。

2・携帯メールに自分の思いを書き、相手にではなく、自分宛てに送る。

すると1週間過ぎる頃に相手からメールが来る。

「これだ！」

既にパジャマ姿の私はソファから立ち上がり叫んだ。キッチンでお茶を飲んでる母が驚き、「どうしたの、瞳。今日、何か変よ。」

「気のせい、気のせい。」

ひらひらと母に手を振り、私は2階の自室に入った。ベッドの上に置いた携帯を取る。

「『噂』……だよね。でも、自分宛てに送るんなら、他のファンの子のメールとかに交じったりしないし、これで想いが伝われば大成功！」

ベッドにごろんと横になり、携帯のボタンを押す。

『透、瞳だよ。ずっと好きだったんだ。今年の夏、何処かでかない？』

そう、もうすぐ学校も夏休み。青春！

今年こそ、いい思い出作るぞ！

そんな事を考えているうちに、私はお腹もいっぱいになり、そのまま寝てしまった。

ジリジリジリ

「あ！」

飛び起きた。もう朝じゃん、学校！

『朝はパンも食venaさいね、コーヒーだけでなく。母より。』

キッチンのテーブルの上には既に出勤した母の置き手紙。

「時間ないし、ダイエット、ダイエット！」

腰まである長い髪を急いでポニーテールにし、白いセーラー服に着替える。そして、家を後にする――もちろん、携帯は忘れずに。

携帯メールもそうだけど、『消しゴム』も実験中。今日、学校の売店で買ったばかり。

「『透』つと。」

昼休みの休憩時間を利用してこっそりとマジックでその名前を書く。

「何やってんの、瞳。」

同級生の優子が声をかけてきた。慌てて消しゴムを隠す。

「何でもない、何でもない。」

につこりと笑って誤魔化す。優子は小首を傾げ、「変なの。お昼も残すし。」

「ダイエット、ダイエット！」

そう、私も透と同じにプロダクションに入って少しでも近い場所にいたい。

その時。

ガラッ・・・

教室の前の扉が開かれ、透が姿を現した。

175cmの長身といわゆる『イケメン』。

が、入って来たのは彼だけじゃなく、他のクラスの取り巻き女子も一緒だった。

そんな彼女らに見向きもせず、透は廊下側の自分の席に座り、勉強を始めた。えらい。あれだけ、学校休んでも成績は常にTOP。それだけは褒めるぞ、透。

「はあ。」

私は溜息を付き、携帯のメールをチェックした。

『着信』しているのは、友人の女の子ばかり。

本当に利くのかな？携帯くん、消しゴムくん。

それから1週間が過ぎた。

夏休みまであと3日。空には眩しい太陽が浮かんでいる。今年は何十年か振りに猛暑が続いているという。

私は学校とアルバイトを終えると、家に帰って夕飯の支度始めた。今夜は『ラタティュー』。ズッキーニと野菜をトマト・ソースで煮込んだ物。暑さ対策とダイエットの為に、タバスコを入れる。

「暑 い！本当に利いてるの？エアコンくん。」

私はそう呟き、エアコンの温度を下げた。

料理はあと、長時間煮込むだけ。

「はー。夏バテかな。」

冷蔵庫からミネラル・ウォーターを取り出し、ソファに腰掛ける。と一気にそれを流し込む。「お母さんも大変だね。」

そんな事を考えた時。

リリリ・・・

Gパンのポケットに入れておいた携帯が鳴った。

「誰かな、優子かな？」

着信履歴を確認してみる。そこには、

『夏休みもらったから、遊ばない？』

「！・・・」

嘘！透からじゃん！

私は慌てて2階の自室に行き、例の『消しゴムくん』を見た。

「・・・減ってる。」

ほとんど無くなっていた。期末試験の為に猛勉強したせいか、
『消しゴムくん』も原型を留めてなかった。

「超ヤバ！」

私はベッドに座り、携帯のメールに返信する。

『うん！行く行く（^^）何処行こうか。』

送るとすぐに返信が来た。

『お前の好きな場所。』

たった一言。透らしい。

『じゃ、決めとくから○月○日は絶対！開けといてね？』

返信する。

『判った。』

「・・・マジ？」

そう思った時、

ピン ポーン

玄関のチャイムの音が鳴った。

「はい！」

私は階段を走り降り、「どなたですか？」

「母ですよー。」

ガチャン

鍵を開けると黒いスーツに黒い鞆を持った、母が入って来た。

「もう、ひどい猛暑よ！お水ちよだい、瞳。」

「うん。」

母の辛そうな表情に、冷蔵庫へと走り寄りミネラル・ウォーター
を取り出した。

「熱中症には気を付けてよ、お母さん。」

「はい。」

500mlを一気に飲み干す母の姿を見て、私は、
（どうしようかな？透との事。話そうかな、どうしようかな？）
複雑な心境だった。

「なーに、瞳。」

母は私の額を小突き、「何かいい事でもあったの？」

凶星。さすが我が母。

「実はね。」

ラタティューユの事をすっかり忘れてしまっていた私。たぶん、煮込み所か鍋焼きだぞ（滝汗）

そして、その日が来た。

家は近くだけど、午前中は仕事とかで午後に〇〇駅の改札口で会う事になった。

「ここ、ここ！」

私は透の姿を見つけると手を上げた。透は無言で人混みをすり抜け、真正面に立った。

見上げる身長と切れ長の目。服は白いシャツにGパン。そして、

伊達メガネ。

いつもの『取り巻き』もいない。

「何処行くんだ。」

ぶつきらばうに透は言った。私は笑って、

「デイズニーのアイス・ショウ。」

「この前見た。」

「じゃ、スカイ・ツリー。」

「撮影で言った。398Mだろ、今。」

「じゃ、お台場。」

「皆行くじゃん。」

私は少し膨れた。そして、透に、

「じゃ、何処行きたいのよ！」

「MAC。」

「はい？」

急にテンションが落ちる私。」「……………MACですか。」

「そう、MAC。」

透はそう答えた。

バイト、一生懸命やってお小遣いもお母さんからもらって何処が
いいかな、って考えて抜いて……………それが、MAC。

店内はわりと空いてる方だった。お昼を少し廻った所だけど。結
局、私たちは待ち合わせ場所の〇〇駅近くのMACへと入った。

「アイス・コーヒーのM2つと、ダブル・チーズバーガー2つ。
それとポテト。」

私がそう注文すると、透が、

「俺、ポテトいらない。」

ぼっん、と言う。

「じゃ、ポテト抜きで。」

「かしこまりました。」

私が店員と話してるうちに、透は3階へと階段を昇り始めていた。

「ちよ、ちよっと待ってよ、透！」

慌てて後を追いかける。

「本当にもう気紛れなんだから。」

アイス・コーヒーを差し出しながら、私は目の前の透に言った。

当の透は涼しい顔をしている。ま、昔からこうだったけどね。

「今日は、夜まで開いてるんでしょ？」

尋ねると、透は、

「開けてあるよ、お前のために。」

「……………」

ドキッ。これって『告』？私は慌ててコーヒーを飲んだ。

「ちよつと痩せたんじゃないのか、深崎。」

「そうかな。私も今、芸能界入り目指してダイエット中だから。」

「あんま無理すんなよ。芸能界ってそんな綺麗な場所じゃないぞ。」

「

そう答える透。心配してくれてるのかな？

「深崎。」

ダブル・チーズバーガーを食べる私に向かって、透は、「MAC
の後、海、見に行こう。」

「はい？」

突然の言葉に、私は目を丸くした。

「海。」

透が重ねて言う。「海だよ……湘南。」

そして、その夜。

私たちは『愛し合った』。まだ、高校生同士だけど、そんなの関係ない。今、あれだけ方思いだった透が目の前にいて私を抱いている。

「深崎。」

唇を離し、透は言った。「いつまでも一緒だからな、離れていても。」

「うん。」

私は頷いた。それだけで、十分だった……

その時。

透は初めて私に暖かい笑顔を見せた。

透……彼が骨髄性脳膜炎という病気にかかり入院していたと知ったのは、それから間もなくの事だった。あと1カ月もてばいい方だと。

私は都内にある某有名大学病院を訪れた。

「手術後の経過も悪く、点滴と人工呼吸器で生きてます。」

透の母親は言った。

「そう……なんですか。」

私は透に寄り添った。

「透、判る？私、深崎 瞳だよ。」

その茶色い髪に触れる。でも、透は眠ったまま。私は、椅子に座

る彼の母親に、

「外出は？例えば、○月○日とか。」

「その日は手術の日でした。」

「……」

じつと透を見つめる。そして、一言。

「ずっと、一緒だからね、透。」

「それは不思議な体験ですね。」

司会者がそう言った。私は今、大学生活と芸能生活を両立している。

今日のTV出演の企画は『夏のホラー2010』というものだった。私が語り終えた後、照明は闇から光へと変わった。

「で、その透さんという人は？」

「亡くなりました。」

私は素直に答えた。「でも、ベッドに寝ている彼の右手には携帯がしっかりと握られていたのを覚えてます。」

「そうですか。よほど瞳さんの事を想ってたんですね。」

「ええ。」

私は強く頷いた。

「それからお付き合いは？」

タレントの一人が茶々を入れる。

「ないですよ！」

私は笑って手を振った。

「そんな事言ってまたまたー！」

「本当ですってば。現に」

と、言って私は紅いバックからデコレを施した赤い携帯を取り出し、「今でもメール来ますから。こうやって。」

あの時のように『透、好きだよ。』と入力し、今度は『透宛て』に送る。すると、間もなく、

『忘れてないよ、深崎。』

メールが返信される。アップの画像で撮られたその光景にゲストも司会者も観客も一瞬静まった。

「・・・・・・・・携帯は」

司会者が口を開く。「透さんが使っていた携帯はどうなさったんですか？」

「色々な仕事とかファンの子との思い出もあるので、一緒にお骨の中に入れて、今は都外のお墓の中です。」

「・・・・・・・・マジ？」

もう一人のゲストが呟く。「これって、マジ。怖くないの、瞳ちゃん。」

「でも、いいんです。」

私は携帯を胸の辺りで握り締め、「透と一緒にいられるから。」

『片想いの貴方も試してみませんか？携帯メールで両想いになる方法。』

<FIN>

（後書き）

いかがでしたでしょうか
「――」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7747m/>

夏のホラー 2010 片想い

2010年10月14日07時00分発行